

令和5年度「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」
「産学連携推進員育成講座の開発」事業

『産学連携推進員』の人材像と必要な資質等を把握する調査 ヒアリング調査結果報告書

I・基本情報

1. Web アンケートの実施

目 的：各校における産学連携の状況や課題等の把握・整理

調査期間：2024年9月19日～9月29日

調査方法：Web アンケート

調査対象：全専研加盟校約120校

2. ヒアリング調査の実施

目 的：アンケート回答校から6校選択し当該人材の資質・要件の深掘り、
ケーススタディ情報の収集

調査期間：2024年11月16日～11月28日

調査方法：調査員2名による対面またはオンライン形式

調査対象：6校（対面3校、オンライン3校）

3. ヒアリング対面調査

- ① 穴吹学園（広島県）穴吹ビジネス専門学校
調査日：11月21日（木）16:00～18:00
回答者：山下 保 先生
訪問者：柳田委員、土井委員

- ② 有坂中央学園（群馬県）専門学校 中央情報大学校
調査日：11月24日（金）10:00～12:00
回答者：柴田 智宏先生、内池 雄先生
訪問者：森川委員、及川委員

- ③ 宮崎総合学園（宮崎県）宮崎情報ビジネス医療専門学校
調査日：11月28日（火）10:00～12:00
回答者：川越 浩一先生、樋口 美千代先生、岩村 聡志先生
訪問者：柳田委員、土井委員

4. ヒアリングオンライン調査

- ④ 龍澤学館（岩手県）盛岡情報ビジネス&デザイン専門学校
調査日：11月16日（木）16:00～17:15
回答者：伊藤 政幸先生
オンライン対応：森川委員、藤井委員

- ⑤ 国際総合学園（新潟県）ncc新潟コンピュータ専門学校
調査日：11月20日（月）16:00～17:30
回答者：山中 裕介先生
オンライン対応：森川委員、及川委員

- ⑥ つくば総合学院（茨城）つくばビジネスカレッジ専門学校
調査日：11月22日（水）16:00～18:00
回答者：高松 秀岳先生
オンライン対応：柳田委員、藤井委員

II・ヒアリング調査結果

①穴吹学園（広島県）穴吹ビジネス専門学校

- ・所属校・・・穴吹ビジネス専門学校
 - ・回答者・・・山下 保 先生
 - ・専修学校における教員経験年数・・・15 年以上
- 教務→広報部→教務を担当。福山は 3 年目。現在は教務部部长
- ・職業実践専門課程の認定を受けている分野・・・工業

A1 - 1.産学連携授業を実施している学科名・目標・時数

- ・学科名・・・ITビジネス学科：2 年制（1 年生 30 名 2 年生 20 名）
 - ・目 標・・・情報活用人材の育成
 - ・時 数・・・60 時間
- 全て 1 年次に実施。通常授業で企業が授業に入って実施

A1 - 2.産学連携授業を実施している内容

- ・提携先企業の IT リテラシー活用事例の研究
- IT パスポートの分野。座学+ワーク 企業事例を元に説明マネジメント、資源管理、スケジュール管理の方法

A1 - 3.現在の主な連携先企業・団体の名称

- ・株式会社 笑幸物産（地域の野菜をネットで販売、小規模店舗販売している）もともと非常勤講師の方が講師としてお越し頂いていたところに依頼
- 開始時期：職業実践として記載したのは昨年度から
初年度：青山商事（ビジネスマンとしての講義）

A1 - 4.連携のアプローチはどちらからか・・・学校側

→12 月にアプローチ。基本的に学科長から

A2.現在の産学連携授業についての満足度・・・満足はしていない

B1 - 1.現在の産学連携授業について満足していない理由

- ・幅広い職業分野を目指す学科のため、連携協力先の企業数を増やしたいがその協力がまだ得られていない
- 現在は 1 社。希望は毎年違う企業と行いたい。現在の企業だけでは限定的。広い職業分野を目指す学科なので、もうちょっと学生に職種の幅を広げてもらいたい。

B1 - 2.課題解決や改善のためどのような方法があると考えますか

・地域産業界との関係をより深め、商工会や物産協会等の支援を受け、様々な連携・取り組みを構築する

→今後、商工会議所に協力いただける可能性がある。行政の協力があれば助かる。

B1 - 3.課題解決や改善のために校内外の支援があるか？

・特にありません

→校内を横断した動きを今後していきたいデザイン分野がうまくいっているので、他の学科に繋げていきたい

B3.産学連携授業のカリキュラムにおける位置づけ

・1年前期・後期の1年間、演習として

→時間数は増やしたい。2年生は就職活動プラスアルファになるので、学科の中心の内は1年生でやっておきたい。うまくやるのは2年次ではあるが、1年生は学生のスキルが追い付いていない

B4.連携先の選定

・前年度（またはそれ以前）からの引継ぎ

→スタート時から変わっているが、そんなに大きく変わっているわけではない

B5.連携先に初回の依頼をするとき重要視していること

・企業連携協力の必要性

→企業にメリットを伝えること。ウィンウィンの関係でないと、ただのボランティアになってしまう。就職は市外が多いので、これからの人材不足から、その分野で活躍できる人材を養成する必要性があるという説明が必要。

・カリキュラムポリシーの伝達

→学校で作成したもの（カリキュラムブック）を提示している

B6.連携授業を実施する前に連携先とどのような内容の打合せをしているか

・達成目標の伝達：

・平等な指導の依頼：

・評価基準の設定：

→山下先生か学科長が担当

C1.貴学に産学連携推進の明確な担当教員がいるか・・・いる

→教務部長、学科長、産学連携室（山下先生、就職部長、副校長）

C2.産学連携に関わる学科の教員数・・・2名

→学科担当（常勤）、IT ビジネス学科 適正な人数だと考えている

C2 - 2.担当教員の役職・・・教務部長

C4 - 1.求められる「知識」を3つ

- ・分野の専門性：
- ・業界の動向：
- ・地域産業界の動向：

→様々な企業と繋がることで得られると考えている

C4 - 2.求められる「技能」を3つ

- ・多段思考力
- ・調整力
- ・問題解決力

→技能を伸ばすための取り組みはない。普段の業務で考えてもらっている

C4 - 3.求められる「態度」を3つ

- ・共通の目標に向かって努力しあう姿勢
- ・誠実さを表す態度
- ・即効性を求めず長期的な目標に向かって努力する姿勢

→学科長に伸ばしてほしいところ

C5.ご自身は産学連携推進担当教員の経験があるか・・・ある

C5 - 1.担当教員を務めた際に実際に求められた・必要と感じた資質能力を3つ

- ・多段思考力
- ・調整力
- ・問題解決力

D1.担当教員に対してどのような支援を行っているか

- ・人員配置の考慮：担当教員になってもらう人の人選
- ・直接の助言

D2.担当教員は連携授業の進捗をどの程度把握、管理しているか ※1が最も低く5が最も高い

(3)

→マイナスの理由:自分自身が把握していなかったから

D3.どんな方法・頻度・内容で進捗管理をするのが理想ですか

・毎授業終了後、連携先担当者への進捗ヒアリングを行い、次回授業計画を練る
→実施した内容に学生がどう反応していたか、反省会のようなものを実施している

D4.担当教員以外の職員のかかわり・支援があるか・・・ない

→これからやっていきたい。

E1.どのように事業評価をしているか

・学生からのアンケート／ヒアリング
・連携先のアンケート／ヒアリング
・外部の有識者からの評価・管理職による評価
→学校関係者評価委員会。部長、副校長。

E2.事業の評価規準は明確に設定できているか・・・まだできていない

E4 - 1.外部連携先から示される評価規準、外部連携先と共有化している達成目標

・打合せ時に設定した科目評価基準以外のものはなし

E4 - 2.産学連携授業について改善の予定があるか・・・ある

E5 - 1.産学連携授業についてどのように変更、改善しようとしているか

・連携協力企業数を増やし、いろいろな業種・職種における産学連携を取り組んでいきたい

E6 - 1.学生からどのようなフィードバックが欲しいか

・「授業を通じて、実際の課題に対処する方法や問題を解決する力が身についた」という問題解決力の向上意見

→学生アンケートより抜粋

E6 - 2.外部連携先からどのようなフィードバックが欲しいか

・「業界を目指す方へ未来への投資として教育に関わり、新しい才能を育てる機会となり良かった」という人材育成に対する評価意見

E6 - 3.かかわった教員からどのようなフィードバックが欲しいか

・「授業を通じて教員も専門知識を共有して実務経験を積み、学生に示唆的な指導を提供することが出来るようになった」という教員スキル向上の意見

E7.産学連携授業を行うことで、学生によってどのような価値をもたらしたいか

・実際の業界や職場での経験を授業の中で提供し、将来のキャリアに向けた方向性を明確にすることができるスキルや職業適性を身につけさせたい

→1年生でやることの目的だと思っている

【その他】

Q. 行政との連携があるか

→これから。地方は行政と関わらないと難しい

Q. こんな研修、講座があったら良かったなと思うもの。

→企業と関わる機会。懇親会みたいなものでもいい

Q. コミュニケーションスキルが難しい学生に対してのサポート

→就職指導、外部の企業様と関わる機会、個人的にサポート教員からの指導。別枠での取り組みはやっていない

【追加項目】

1. 必要と考える資質能力について、なぜそのように考えたか、感じたか (C5 - 1)

多段思考力・調整力・問題解決力

→学生と企業の間で立って、指導員としては企業の方と結びついてコンセンサスを取りながら、企業にうまく伝えていく力が必要

2. 必要と考える資質能力について、今、その自己研鑽や組織的なスキルアップのための支援として現在どのような機会があるか、また今後どのような機会を望みますか

・現在どのような機会があるか

→全専研の研修。学校では年間の必須研修時間が最低 15 時間ある。(専門研修も時間に含めて OK)

・今後どのような機会を望むか

→企業と関わる機会。懇親会みたいなもの

3. 上記の(教員の)資質能力の評価について、これまでに実施していますか

→ない。業績評価のみ

4. (具体的な事例について) 外部連携の評価について現状どのように実施していますか

→学生アンケートが中心

5. (好事例について) 効果的な外部連携を推進するために、外部との調整・成果物共有・評価のために使用しているツール (デジタル・アナログ) がありますか

→学科としてはない。他の学科は Slack を利用している。

・外部との調整用ツール

→Slack

・成果物を共有・評価のためのツール

→成果物の共有：作品集 (冊子) を毎年度作成し、企業に渡している。

企業からは賞状を頂いている。

6.現状の取り組みについて実感している価値 (学校でフォローできない情報へのアクセスや、技術習得など) 以外に、「学生のキャリア形成」の観点で、先生方が感じる価値はどのようなものがありますか

→学生の成長として感じるもの：学生が地元のことを知らない。地元こんな企業があるんだと知ることがある。それが今後の職業選択に活かしている。例) 造船業：ホテルなど他業種展開しているなど

②有坂中央学園（群馬県）専門学校 中央情報大学校

- ・所属校・・・中央情報大学校
- ・回答者・・・柴田 智宏 先生（同席者 内池 雄先生）
- ・専修学校における教員経験年数・・・5～10 年
- ・職業実践専門課程の認定を受けている分野・・・工業

A1 - 1.産学連携授業を実施している学科名・目標・時数

- ・学科名・・・ポップカルチャー学科 →学科設立から約3年経過
- 1年生18名 2年制34名
- ・目 標・・・動画編集スキルの習得
- ・時 数・・・60 時間 →アクターエフェクト中心ではあるが、妥当な時間数

A1 - 2.産学連携授業を実施している内容

- ・映像編集に必要なソフトウェアである「Premiere」「AfterEffects」の操作を習得する
- 学内に上記操作指導を行う教員はいない

A1 - 3.現在の主な連携先企業・団体の名称

- ・インターメディアサービス
- 伊勢崎の企業
- 連携歴としては10年以上のお付き合い

A1 - 4.連携のアプローチはどちらからか・・・学校側

- 柴田先生の入職時より前からの付き合いのため、経緯は分からない

A2.現在の産学連携授業についての満足度・・・満足している

- 点数を付けるとすると100点満点
- カリキュラム編成でご無理を言っている中で対応してもらっている学生の成長もしっかり確認できる

B2 - 1.現在の産学連携授業について満足している理由

- ・動画編集の授業を長く続けてもらっており、発表イベントにおける課題提出を確実に実施してくれる
- 信頼関係が構築できている 非常勤のような形式
- 2月に実施するイベントで授業の成果発表を実施

B2 - 2.好事例と感じた授業についてどんな点が評価できたか

- ・学生たちがソフトウェアを自由に使いこなすところを見たときにスキルの上達を認識し評価できた
- ツールを最大限に生かすため、幅広い視点からソフトウェアの使用方法を指導してくれている

B2 - 3.さらなる充実のためにどんな好内外の支援が必要か

・学科全体で授業をするには、授業の必要性を疑問に考える学生がいるため、できれば専攻単位で授業を行いたいが、コスト面で難しいので学科単位での実施となっている。最適な授業を担当してくれる企業を見つけるのが難しいと感じている

→イラスト、CG、ゲーム、アニメーションという専攻に対し、全てに共通する連携ができていない。職業実践として最適か、と問われると疑問も残る

B3.産学連携授業のカリキュラムにおける位置づけ

・2年前期の映像編集応用I、1年前期の映像編集Iについて全ての授業コマを企業の方に担当してもらっている

→企業は授業運営も業務内容に位置付けて活動してくれている

B4.連携先の選定

・前年度からの引き継ぎ

B5.連携先に初回の依頼をするとき重要視していること

・授業のゴール設定と、この授業を受けることで専門分野の就職をさらに希望してもらえるよう授業をして欲しい

→毎年専門分野への就職率としては高くても20%受験してもなかなか内定を取れない

→実写合成ができるようになることをゴールとして設定

B6.連携授業を実施する前に連携先とどのような内容の打合せをしているか

・学生の特徴とスキルレベルの確認

・最終課題のレベル設定について

→個性や特性が多様化しているため、写真ベースで学生の特徴を説明している

→業界標準に到達することを基準とはしている

C1.貴学に産学連携推進の明確な担当教員がいるか・・・いる

→柴田先生

C2.産学連携に関わる学科の教員数・・・1名

→インターメディアサービスとの連携をしているという点では1名

C2 - 2.担当教員の役職・・・デザイン教育課課長

C4 - 1.求められる「知識」を3つ

- ・学生のスキルレベルの把握
- ・一般的な思考
- ・スケジュール感を認識している

C4 - 2.求められる「技能」を3つ

- ・コミュニケーションスキル
- ・提案力
- ・調整力

C4 - 3.求められる「態度」を3つ

- ・何事にも挑戦する姿勢
- ・協調して物事を進める姿勢
- ・何とかする姿勢

→特に何とかする姿勢が重要

C5.ご自身は産学連携推進担当教員の経験があるか・・・ある

C5 - 1.担当教員を務めた際に実際に求められた・必要と感じた資質能力を3つ

- ・ヒアリングを通して実際に何をするのが正解なのかが提案できる能力
- ・絶対にやり遂げると言う何とかする能力
- ・まずやってみると言う挑戦する気持ち

→これまでの回答と同様

D1.担当教員に対してどのような支援を行っているか

- ・研修、面談
- ・人員配置の考慮
- ・授業時間の調整
- ・直接の助言
- ・働き方の改善指導

→研修：全専研等を活用

→柴田先生が各教員のスキルレベルを把握し研修を組み立てている

→自分よりもスキルが高い教員に対して、学生への接し方や伝え方、学生への傾聴度合についてアドバイスをしている

D2.担当教員は連携授業の進捗をどの程度把握、管理しているか ※1が最も低く5が最も高い

(3)

→週間授業報告書を活用しており、週単位では把握している状況

D3.どんな方法・頻度・内容で進捗管理をするのが理想ですか

- ・把握、管理は適度が望ましいと思う。あまり口を出し過ぎると、逆に思ったような行動ができなくなり、精度が落ちるため
- 気持ちよく学生が授業を受けられることが重要
- 連携企業を増やしていく必要性は感じている。一方でそのような企業が見つからない

D4.担当教員以外の職員のかかわり・支援があるか・・・ある

D5 - 1.現在の連携体制

- ・各科目の分野ごとに担当職員がいるので、企業の方とはその職員が連携をとっている

D5 - 2.連携を推進する上で組織的な課題や、考える点

- ・特になし

E1.どのように事業評価をしているか

- ・学生からのアンケート／ヒアリング
- ・外部の有識者からの評価
- 学生アンケートは決まった項目がある(半期に一回振り返りのためにアンケートを実施)
- 教育課程編成委員会にて実施

E2.事業の評価規準は明確に設定できているか

- ・できている

E3 - 1.具体的な評価規準

- ・課題提出などの平常点や出席率及び期末課題の点数を考慮して評価を行う

E3 - 2.評価規準は全職員（校内）に周知されているか・・・はい

E4 - 1.外部連携先から示される評価規準、外部連携先と共有化している達成目標

→E 3 - 1 と同様

E4 - 2.産学連携授業について改善の予定があるか

- ・ある
- アニメーションはできそうだが、3DCGやゲームについては中々前に進めていない

E5 - 1.産学連携授業についてどのように変更、改善しようとしているか

・授業科目の変更と連携企業の変更を検討中。現在の連携科目は学科全員が受講するにはレベルが高いため、選択科目に変更するので別の科目を検討している

E6 - 1.学生からどのようなフィードバックが欲しいか

- ・動画編集に興味を持てた
- ・このスキルをもっと高めて就職活動に活用したい

E6 - 2.外部連携先からどのようなフィードバックが欲しいか

- ・積極的に授業を受けている
- ・レベルの高い作品を提出してくるので今後は楽しみ

E6 - 3.かかわった教員からどのようなフィードバックが欲しいか

- ・課題ではなく自分の作品に昇華できるよう頑張ってもらいたい
- 自発的に活動して作品づくりができるようになってほしい

E7.産学連携授業を行うことで、学生によってどのような価値をもたらしたいか

- ・業界で必要とされるスキルを身につけて、就職活動の武器になり得るものとしたい
- 群馬県内にはポップカルチャーに関連する企業は少ない

【その他】

→同一企業と長く連携をしていることによる弊害はあるか？

特になし

→全体では課長クラスが連携案件を担当しているため6名ほど

→ポップカルチャー学科だけで言うと連携は少ない

③宮崎総合学園（宮崎県）宮崎情報ビジネス医療専門学校

- ・所属校・・・宮崎情報ビジネス医療専門学校
- ・回答者・・・岩村 聡志先生（校長）九州校科自動車専門学校も兼務
樋口 美千代先生（教務部 部長）
川越 浩一先生（教務部 課長）
- ・専修学校における教員経験年数・・・10～15 年
- ・職業実践専門課程の認定を受けている分野・・・工業

A1 - 1.産学連携授業を実施している学科名・目標・時数

- ・学科名・・・情報システム科 学生数：1 年生 100 名、2 年生 100 名
- ・目 標・・・高度なスキル習得
- ・時 数・・・540 時間 1 年前期：週 3 コマ（半年）後期：週 9 コマ（1 コマ 50 分）

A1 - 2.産学連携授業を実施している内容

- ・AI 1 年次
 - ・アプリ開発に関する講義 1 年次
 - ・Python（プログラミング）2 年次
- 学校内での授業として実施

A1 - 3.現在の主な連携先企業・団体の名称

- ・株式会社デンサン 元々学生用の PC を購入するなどのつながりがあった
- IT 機器を取り扱っている

A1 - 4.連携のアプローチはどちらからか・・・企業・団体側

- デンサン側の事業推進部と教務で連携を組んでやっている
次年度の依頼のタイミングは 12 月頃

A2.現在の産学連携授業についての満足度・・・満足している

- 通常の授業では補完できない部分を連携してやっていただいている

B2 - 1.現在の産学連携授業について満足している理由

- ・現職のエンジニアが、最先端の動向や技術について講義を実施してくださるため

B2-2. 特に、好事例と感じた授業について、どんな点が評価できたか教えてください

- ・本校職員ではカバーできない最新の分野について講義していただける点

→IT 分野

B2-3. さらなる充実のためにどんな校内外の支援が必要でしょうか？

- ・コストの部分で支援があれば、他の企業への依頼も可能となり、更に充実したカリキュラムを組むことができる

→色々な分野の授業。外部の著名な方をお呼びして学生に還元できると、学生満足度も高まり、カリキュラムも充実すると思う

→コスト面で妥当なのか、他校の水準が知りたい。IT 系は高額になる現状は法人で予算が組まれていて、それをベースに調整をしている

B3.産学連携授業のカリキュラムにおける位置づけ

- ・AI：1 年次の G 検定受験に向けての講義
- ・アプリ開発：1 年次アプリ開発手法の習得
- ・Python：2 年次のプログラミング応用スキルの習得

B4.連携先の選定

- ・前年度（またはそれ以前）からの引継ぎ →現在の企業との連携は 2 年前から

B5.連携先に初回の依頼をするとき重要視していること

- ・学生に学ばせたい講義内容

→口頭での担当者の方とのすり合わせ

B6.連携授業を実施する前に連携先とどのような内容の打合せをしているか

- ・講義内容（シラバス）：タイミングは 12 月～1 月までには
- ・スケジュール
- ・費用面
- ・本校での授業ルール等

C1.貴学に産学連携推進の明確な担当教員がいるか・・・いない

→教務課長、部長

C4 - 1.求められる「知識」を 3 つ

- ・本校の対象学科に関する知識
- ・IT 分野についての専門性：最新の技術に対しての研修に参加
- ・IT 業界についての専門性

C4 - 2.求められる「技能」を3つ

- ・コミュニケーションスキル
- ・ビジネススキル
- ・IT リテラシー

→文科省委託事業での外部の方との繋がりができる機会があれば積極的に参加している

C4 - 3.求められる「態度」を3つ

- ・IT 業界の動向に目を向ける
- ・緻密さ
- ・常に迅速な対応

→企業様に求人をお願いをする際に、業界動向などをお伺いするようにしている

C5.ご自身は産学連携推進担当教員の経験があるか・・・ない

D1.担当教員に対してどのような支援を行っているか

- ・その他

→学科のメンバーと連携している

D2.担当教員は連携授業の進捗をどの程度把握、管理しているか ※1 が最も低く 5 が最も高い

→ (3)

→外部の先生には月報管理を提出していただいて、進捗状況を管理している
また、職員が授業に入って、進捗状況を確認している

D3.どんな方法・頻度・内容で進捗管理をするのが理想ですか

- ・先程も回答したが連携推進職員がおりません

D4.担当教員以外の職員のかかわり・支援があるか・・・ない

→学校間での横の繋がりはない

→今後は学科間を超えた連携も行っていきたい

現状、医療と情報は一部行っている。IT リテラシー、医療情報技師等において

E1.どのように事業評価をしているか

- ・学生からのアンケート／ヒアリング

→半期ごとに学生アンケートを取っている

E2.事業の評価規準は明確に設定できているか

- ・まだできていない

→成績評価については企業側にさせていただいている（期末テストの作成、筆記試験）

E4 - 1.外部連携先から示される評価規準、外部連携先と共有化している達成目標

・特になし

→シラバスにあり

E4 - 2.産学連携授業について改善の予定があるか・・・ある

→企業数を増やしたい、授業数、実施時期（現状だと早い）

E5 - 1.産学連携授業についてどのように変更、改善しようとしているか

・現在の科目の選定・見直し

→学生アンケートの結果を企業側にフィードバックしている

E6 - 1.学生からどのようなフィードバックが欲しいか

・授業のわかりやすさ（企業側と共有している）

E6 - 2.外部連携先からどのようなフィードバックが欲しいか

・優秀な学生の採用に繋がる

E6 - 3.かかわった教員からどのようなフィードバックが欲しいか

・学生のスキル向上が目に見えてわかる

・企業の就職につながる

E7.産学連携授業を行うことで、学生によってどのような価値をもたらしたいか

・IT 業界の先端技術の習得につながり、そのスキルを活かして希望する就職が可能となる

【その他】

Q.産学連携研修に向けて、参加してみたい研修

→様々な企業様と繋がれるような懇親会、宮崎県内のIT企業との繋がりが欲しい

※現在の就職先は県内が4割、6割は県外（福岡、熊本）

Q.学生のコミュニケーションスキルを上げるための取り組み

→就職指導

面接練習、企業様へのアポの取り方、レジュメの書き方など

（課題）

・スキルをもった教員の確保。宮崎 IT plus という会合がある。そういう場で教員の確保をしたことがある。

・連携授業が座学中心であり、企業様は教えるプロではないので、聞いているだけで飽きてしまうことがある。何を言っているかわからないという学生の評価も多い。

【追加項目】

1. 必要と考える資質能力について、なぜそのように考えたか、感じたか (C5 - 1)

- ・本校の対象学科に関する知識 →企業様に説明しなければならないため
- ・IT 分野、業界についての専門性 →専門の知識が必要なため

2. 必要と考える資質能力について、今、その自己研鑽や組織的なスキルアップのための支援として現在どのような機会があるか、また今後どのような機会を望みますか

- ・現在どのような機会があるか

→全専研の研修等

- ・今後どのような機会を望むか

→最新の技術に対しての研修に参加（費用面でのバックアップ）

3. 上記の（教員の）資質能力の評価について、これまでに実施していますか

→特に実施していない

4.（具体的な事例について）外部連携の評価について現状どのように実施していますか

→学生の授業アンケート評価を共有

5.（好事例について）効果的な外部連携を推進するために、外部との調整・成果物共有・評価のために使用しているツール（デジタル・アナログ）がありますか

- ・外部との調整用ツール

→Slack のみ（学生、企業が入っているチャンネルがある）

- ・成果物を共有・評価のためのツール

→Slack

6.現状の取り組みについて実感している価値（学校でフォローできない情報へのアクセスや、技術習得など）以外に、「学生のキャリア形成」の観点で、先生方が感じる価値はどのようなものがありますか

→AI を知識だけでなくどのように現場で活用しているのかを知り、現場のイメージを共有すること。そうすることで就職後のギャップを防ぐことができる

④龍澤学館（岩手県）盛岡情報ビジネス&デザイン専門学校

- ・所属校・・・盛岡情報ビジネス&デザイン専門学校
 - ・回答者・・・伊藤 政幸 先生
 - ・専修学校における教員経験年数・・・5～10 年
- ⇒前職は営業職を担当。当初は広報を担当、その後、教務に転換。
- ・職業実践専門課程の認定を受けている分野・・・工業

A1 - 1.産学連携授業を実施している学科名・目標・時数

- ・学科名・・・情報ビジネス科
- ・目 標・・・学んだ知識をアウトプットする場とし社会経済のキャッシュフローを経験する)
- ・時 数・・・60 時間

⇒明確に企業とからんで何かをする時間が 60 時間。これ以外に課外活動（土曜日や放課等）で企業連携を行っている。活動時間は少なくとも倍（プラス 60）程度。

A1 - 2.産学連携授業を実施している内容

・商品またはサービスの企画を行い、連携企業の選定および協力交渉を行う。そのうえで利益を生む活動を実践する

⇒何年かかけてここまで構築してきた。学校で販売の場所を用意するのが STEP1。

STEP2 は販売する場所等を自分たち（学生）で検討、

STEP3 は企業も自分たち（学生）で探す。今は、STEP3 となっている。

Q カリキュラムポリシーに基づいて考えられているのか？

⇒他の学校の取り組み、大学の取り組みを参考にしながら考えている。

試行錯誤しながら進めていて 4 年目を迎える。

A1 - 3.現在の主な連携先企業・団体の名称

- ・みちのくコカ・コーラボトリング株式会社
- ・株式会社 FamilyMart

A1 - 4.連携のアプローチはどちらからか・・・企業・団体側

⇒過去の繋がりや、卒業生が働いている企業からお声がけいただくこともある。企業側からの連携のお声掛けは年間通して多くあり、内容を精査してお断りするケースもある。提案いただいた内容については精査して、内容によって連携を様々な学科に割り振りすることがある。中には、学科を横断するケースもある。自分が担当するビジネスのみの場合もある。

A2.現在の産学連携授業についての満足度・・・満足している

⇒良いものは 80 点。

Q グループ評価と個人評価は別？

⇒特にそこまではしていない。全体の評価が個人評価となる。

Q ビジネスの場で情報をどう実践するか？活用させることはどうしているか？

⇒動機付けとしてはプロとして、企業と一緒に活動していくことを前提に動機付けをする。

最初から成功するわけではない。失敗も経験という意識を持たせる。失敗したことについて、指摘するのではなく、失敗したことを責めるより、次どうしていくのかを試行錯誤していくことを考えさせていることの方が重要だと考えている。

Q 実際に失敗した際は？

⇒企業側からと教師側の両方からアプローチして、フォローいる。(ケースバイケース)

B2 - 1.現在の産学連携授業について満足している理由

・企画・提案・交渉・実践を経験し、さらに実利を伴った活動が出来ている点。教員が実行委員として新たな街のイベント「盛岡楽縁祭」の立ち上げに携わり、学生は複数の企業人で構成されたイベント実行委員会に対し、マーケティングの観点を絡めたブース企画や売上予測等をプレゼンし、許可を得た縁日を 20 店舗運営した。結果、数十万の利益を得てイベント内で最大の貢献を果たした。

⇒イベントに産学連携を取り入れている。イベントで様々な企画・販売をしている。学生主体で運営。

Q 利益はどうしている？

⇒学生に還元している。元々は商売を経験させたいという思い。現金を返すのは難しいので、学生達が喜ぶものを提供している。楽縁祭は初めてのイベントで 1 万人動員した。参加者は地域の方がメイン。元々の目標は 5,000 人が目標。当日はテンヤワンヤな状態だった。参加者からは色々なお言葉をいただき、良いも悪いも含め勉強になったのではないかと考えている

B2 - 2.好事例と感じた授業についてどんな点が評価できたか

・学生でありながら、複数の企業と同じ目的をもって本気で活動することが出来た点。失敗できない環境下でインプットした知識を活用した点。マーケティング、簿記、illustrator、販売士など

Q 良い事例？課題感？

⇒良い事例としては、先輩たちがイベントをやっている事を知っているからか、年々連携に前向きな学生が増えてきている。実際にファミマの SNS の広報をしたり、企画をしたりしている。学生自ら行っている点は評価している。あとは、JT も巻き込んで連携したりしている事も、水平展している部分も評価している。

B2 - 3.さらなる充実のためにどんな好内外の支援が必要か

・学校外で継続した活動をするため、地域に溶け込んだ店舗などを学生向けに借りられるような仕組みや補助があると有難い

Q アンテナショップのようなイメージ？

⇒本当に企業連携をする際に、学校という意識をなくしていきたい。
店舗・ミーティングルームがあるだけで意識が変わってくると思う。

Q 実現の見込みはありますか？

⇒今は、学校として、来年・再来年に向けて上記のような場所を検討している段階。

B3.産学連携授業のカリキュラムにおける位置づけ

・成長ステップを考慮しながら、年間を通じて2～3回実践

Q 多いのか、少ないのか？楽縁祭に通じて？

⇒楽縁祭は、たまたま。本来は、STEP1-3 に則り実施。STEP1-3 がそのまま回数となる。

B4.連携先の選定

・双方にメリットがあれば選定の入り口はない

B5.連携先に初回の依頼をするとき重要視していること

・教育方針、学生に学生らしさを求めないでいただきたいこと

⇒「教育方針」と「学生に学生らしさを求めない」ということを重要視している。企業様からお声がけいただいたときに、学生らしいアイデアを出していただきたいと言われることがあるが、学校サイドとしては学びの場として社会人の考え方、プロの視点を持ってほしいと思っている。

B6.連携授業を実施する前に連携先とどのような内容の打合せをしているか

・目的、役割、スケジュール、双方のメリット・デメリット、リスク管理

Q 事例はありますか？

⇒色々足りないことがあって...例えば、楽縁祭の例ですと、利益が出たらどうするか等、決まっていな
いまま進んでしまう事もあった。そういったこと（うやむやな状態）がないように、事前に企業様と
色々なことをはっきりさせた状態で、進めていきたいと思っている。まだまだ勉強中です。

C1.貴学に産学連携推進の明確な担当教員がいるか・・・いる

C2.産学連携に関わる学科の教員数・・・2名

⇒学科全員で取り組んでいる。

C2 - 2.担当教員の役職・・・教務課長

C4 - 1.求められる「知識」を3つ

- ・ 業界を横断する知識
- ・ 時事に関する知識
- ・ 地域に関する知識

Q 知識を深めるために取り組んでいることは何か。

⇒具体的にはないのですが、アンテナを立てている。

大人として新聞読む・ニュースを確認する等。

Q 横断する知識は？

⇒元々営業やっていたので、その際の知識・経験を活用していく。

Q 組織として何かあるか？

⇒このために何かがあるわけではない。

C4 - 2.求められる「技能」を3つ

- ・ コミュニケーションスキル
- ・ 事務処理スキル
- ・ ビジネスマナー

Q 具体的な取り組みを教えてください。

⇒全専研主催や一般の研修の参加、学科内の教職員研修で学ぶ等。

C4 - 3.求められる「態度」を3つ

- ・ 企業を理解しようとする姿勢
- ・ 変化に強く、挑戦しようとする姿勢
- ・ 学生の人間的成長を考えられる姿勢

Q 取り組みはありますか？

⇒特に...ビジネス課の教員はもう一人いるのですが、卒業生がいった企業を調べたり、他の学科が連携している企業を調べたりしている。とにかく、今の自分たちに不足していることを調べていく。

C5.ご自身は産学連携推進担当教員の経験があるか・・・ある

C5 - 1.担当教員を務めた際に実際に求められた・必要と感じた資質能力を 3 つ

- ・コミュニケーション能力
- ・学生の人間的成長を考える姿勢
- ・マネジメントスキル

D1.担当教員に対してどのような支援を行っているか

- ・研修
- ・直接の助言

D2.担当教員は連携授業の進捗をどの程度把握、管理しているか ※1 が最も低く 5 が最も高い
(4)

Q マイナス 1 の理由

⇒それぞれが別の連携活動をしていたり別の学年を担当していると、連絡ミス等が起こっている。
科目の引継ぎが出来ていないこと、情報の共有が出来ていないこと

D3.どんな方法・頻度・内容で進捗管理をするのが理想ですか

- ・日々のコミュニケーション
- ・スプレッドシートなどでいつでも同じ資料を確認できる

D4.担当教員以外の職員のかかわり・支援があるか・・・ある

⇒管理職・就職支援の担当者と連携・支援がある。

D5 - 1.現在の連携体制

- ・必要に応じて学科を横断してプロジェクトを組んでいる

Q 最近の事例

⇒楽縁祭にて、縁日はビジネス、パンフ等はデザイン課、HP はシステム課の横断が出来ている。

D5 - 2.連携を推進する上で組織的な課題や、考える点

- ・窓口を集約し、学科・グループ校を超えた連携になると良い

Q 窓口はバラバラ？

⇒学校毎に入ってくる話がほとんど、グループ 7 校で統一の窓口があるとより良くなるはず。

E1.どのように事業評価をしているか

- ・ 学生からのアンケート／ヒアリング
- ・ 連携先のアンケート／ヒアリング
- ・ 管理職による評価

学生自己評価

⇒自己評価とリアクションという形で、分からなかったことや、何に躓いたのか等を忘れないようにアンケートをとっている。

管理職

⇒卒業研究として企業と活動する場合がある、最後にプレゼンテーションを行い、他の先生にプレゼンし評価してもらう。

当然学科の先生の評価も入ってくる。

⇒そうですね。

E2.事業の評価規準は明確に設定できているか・・・できている

E3 - 1.具体的な評価規準

- ・ 課題を明確に捉えているか
- ・ 課題発見の根拠は説明できているか
- ・ 根拠はデータなどを用いて、客観的な視点で見ているか
- ・ 目的に対するアプローチは妥当か
- ・ 達成に向け活動に工夫はみられるか
- ・ 成果をデータで示しているか
- ・ 活動の成果はあったと言えるか
- ・ 活動の成果はあったと言えるか ※企業アンケート
- ・ 連絡手段などを工夫し、企業と関わりやすい環境を作ったか
- ・ 活動に計画性はみられるか
- ・ 学生側から提案または意見交換できているか ※企業アンケート
- ・ 企業接触時のマナー ※企業アンケート

Q 実際この通り評価できているか？

⇒実際に使った評価シートからの抜き出し。

Q 少し難しい評価もありますか？

⇒活動の成果はあったと言えるかという質問は、昨年度までは評価しづらかったと思う。今年利益が絡んでくるので、評価しやすかったのではないかと思う。

E3 - 2.評価規準は全職員（校内）に周知されているか・・・いいえ

⇒学科ごとに評価が違うから。プレゼンに参加された方に評価してもらったので、他の学科には公開していない（聞かれれば公開する）

E4 - 1.外部連携先から示される評価規準、外部連携先と共有化している達成目標

- ・活動の成果はあったと言えるか
- ・学生側から提案または意見交換できているか
- ・企業接触時のマナー
- ・成果物または活動の満足度

⇒連携していた企業にもアンケートを実施していて、上記の回答をしている。企業様の評価にブレがなくなるように、ここまで出来ていたら、この評価というものを提示していて、それに沿って評価してもらっている。

E4 - 2.産学連携授業について改善の予定があるか・・・ある

E5 - 1.産学連携授業についてどのように変更、改善しようとしているか

- ・基本的な活動の場を学外に設けたい
- ・教員と企業だけでなく、市や県の協力も図りたい

⇒アンテナショップのようなものを設ける。

Q 提案はしていますか？

⇒まだできていない。今後の課題。

E6 - 1.学生からどのようなフィードバックが欲しいか

- ・成長できた
- ・働く意義を知れた
- ・大変だったけど、やって良かった

⇒意識の高い学生の一部は、上記のような回答をしてくれる学生もいるが全員ではない。多くの学生から、上記のような回答となるように指導していく。

E6 - 2.外部連携先からどのようなフィードバックが欲しいか

- ・社内には無い新しい発見があった
- ・学生の教育にもっと関わりたい
- ・継続して活動したい

Q 地域連携や評価は重要だと思う、実際に上記のような意見がある？

⇒まだ少ないが、一部の企業様からは上記のような意見をいただいている。

E6 - 3.かかわった教員からどのようなフィードバックが欲しいか

- ・次はもっとこうしたい

⇒今回は、企業様から指定があつて準備したけど、次は学生に考えさせたいという声が自然と出てくれば、良いものとなっていくと思う。

E7.産学連携授業を行うことで、学生によってどのような価値をもたらしたいか

- ・働く大人と関わることで、将来を考えるきっかけになってほしい
- ・働くことで誰かの役に立ったり、地域の役割を果たしていることを実感してもらいたい
- ・それが楽しいと思ってもらえるのが理想

【追加項目】

1. 必要と考える資質能力について、なぜそのように考えたか、感じたか (C5 - 1)

- ・コミュニケーション能力

⇒企業様は様々なプロである。そのプロの方々と色々な情報をお互いに共有したり、決めづらいことを決めなければいけない。企業様と交渉するためには、コミュニケーション能力が必要となる。

- ・学生の人間的成長を考える姿勢

⇒先生方は学生達がかわいいので、先生が（失敗しないように）先回りしてやってしまう事もある。そこを我慢して待つ姿勢が大事だと考える。ただ、丸投げで待つのではなく、学生がこれを行えばこの力がつく、ということを考えて、この姿勢をもってやっていくことが必要。学生達にもやった感を持ってもらえるように考える姿勢が大切。

Q 実際に取り組みされて、先生の想定している人間的成長を実感したか？

⇒起きているケースもあるし、思い通りにならないケースも多々ある。

Q 具体的には？

⇒本来の目的の「企業様とビジネスを成功させる」ことも大切だが、チームとして活動することが重要と考える。例えば、チームの中で「あの子は全然参加してくれない」という不満が出た場合は「どうすればよかったのか？」を徹底的に考えてもらった。結局その子たちが参加しない理由は、お互いの意思疎通ができていないからで、最終的にお互いに納得するまで話し合いを行って上手くまとまった。

- ・マネジメントスキル

⇒プロとしてスケジュールリングを行うことは大切。スケジュールリングを行う際に、予想外を想定することが大切。また、学生のメンタル支援もできる事も大切。そういう意味でマネジメントスキルは重要。

2. 必要と考える資質能力について、今、その自己研鑽や組織的なスキルアップのための支援として現在どのような機会があるか、また今後どのような機会を望みますか

・現在どのような機会があるか

⇒職業実践の指定校なので必ず研修を受ける。全専研や一般研修に参加することを心掛けている。また、現在大学に通っていて心理学を学んでいる。これが業務に生きてくると良いと思っている。

今後どのような機会を望むか

⇒企業様と学校側のマッチングフェアがあっても面白いと思う。

Q どういった情報が企業側にあると良いか？

⇒今困っていることや、何か新しいことをやってみたいという企業様はたくさんあると思うが、学校にはなかなか立ち寄りづらい。それを知り合う場があるだけで面白いのと思っている。

3. 上記の（教員の）資質能力の評価について、これまでに実施していますか

⇒特にはないです。当校の場合は、教務課長が先生を評価することはない
現在、評価制度を構築中です。

4.（具体的な事例について）外部連携の評価について現状どのように実施していますか

⇒卒業研究の場で、必ず企業と絡んで利益を出す。最後のプレゼンの場を設けている。

5.（好事例について）効果的な外部連携を推進するために、外部との調整・成果物共有・評価のために使用しているツール（デジタル・アナログ）がありますか

・外部との調整用ツール

⇒チャットを利用。スプレッドシートの共有。調整さん等も使用している。

※メールは使っていない

・成果物を共有・評価のためのツール

⇒スプレッドシートの共有。

6.現状の取り組みについて実感している価値（学校でフォローできない情報へのアクセスや、技術習得など）以外に、「学生のキャリア形成」の観点で、先生方が感じる価値はどのようなものがありますか
⇒知っていることと出来ることが違うと感じる場。働くというイメージが変わる。イメージ転換が必要だと感じる。検索すれば、何でも知識が得られる時代で、今の学生達は失敗したくない思いから、先行して答えを検索してしまう。しかし、重要なのは、答えがないものは失敗しながら経験を積んでいくことだと考えている。

⑤国際総合学園（新潟県）ncc 新潟コンピュータ専門学校

- ・所属校・・・ncc 新潟コンピュータ専門学校
- ・回答者・・・山中 裕介 先生
- ・専修学校における教員経験年数・・・5～10 年

→今の学校で10年

アニメマンガ専攻でキャラクターデザインを担当していた

※前職はゲーム会社でキャラクターのグラフィッカー

- ・職業実践専門課程の認定を受けている分野・・・工業

A1 - 1.産学連携授業を実施している学科名・目標・時数

- ・学科名・・・キャラクターデザイン科
- ・目 標・・・XR 先端技術の実践
- ・時 数・・・60 時間

→1 学年 25～30 人 1 年制～3 年制

1 年制は実務的なことはやらないが、知識ベースでは学習

1 年制以降が実務的に関わる

→60 時間という時間数は妥当

案件によってはもっと短い案件もある(30 時間)

A1 - 2.産学連携授業を実施している内容

- ・XR コンテンツの制作と 5G 環境下での実装作業（デバイスでの可視化）

→メタバースに関する取り組みを学校としては2022年から開始

無線の状態で、メタバース空間でできることを表現できないか(特に屋外)その実証実験を企業と取り組んだ

A1 - 3.現在の主な連携先企業・団体の名称

- ・NTT ドコモ
- ・株式会社ドコモビジネスソリューションズ

→過去の連携実績はなし

授業で使用するツールを購入等していた就職実績としてはあり

A1 - 4.連携のアプローチはどちらからか・・・学校側

→定期的にイベントに学生の作品を出展

新潟市の情報発信を担う(Vtuber を用いて)

新潟市が5Gの実証実験をすることになり、企業と学校、自治体のタイミングが合った

A2.現在の産学連携授業についての満足度・・・大変満足している

→点数で表現すると200点

B2 - 1.現在の産学連携授業について満足している理由

・企業との連携で新潟市のXR事業に参加することができた。これらの実績で学生の内定、学校のPRに繋がった。

→XR事業をやりたがっている県内ではトップクラスの企業に内定5G関連イベントの現場スタッフの学生が現地でスカウトされた

B2 - 2.好事例と感じた授業についてどんな点が評価できたか

・企業との連携で先端技術に学生が触れ、それを若者が活用する事で企業も新しい発見があったそうです。双方にとって得るものが多かった。

→採用実績も含め、WINWINの関係を作れた

現在も新規案件に取り組んでいる

ドコモとは現在も特別授業等で継続して繋がっている

B2 - 3.さらなる充実のためにどんな好内外の支援が必要か

・産学連携の実証実験、プロトタイプ制作を世に知ってもらう広報支援、発表できるイベントがあると良い

→今年(11月)に新潟市主催イベントとして、県内企業の新たな取り組みとして発表の機会を得る ※AI関連 ※新潟市とは教育連携を結んでいる

B3.産学連携授業のカリキュラムにおける位置づけ

→二年前期から卒年次の前期。企業連携による実習体験、制作参加による実績作りのため

→1年前期 企業からの説明会(前期3回、後期3回最低でも企業が登壇)

2年前期 制作開始

3年 実績作り

※オンラインの活用により授業参画の回数は増えた

※学生も質問しやすくなった

B4.連携先の選定

・教員によるネットワーク開拓

→連携がうまくいかなかったケースとして、複数企業から同時の依頼がありお断りしたこともある
連携に慣れていない企業からの依頼は教育現場への理解の薄さからお断りすることも

B5.連携先に初回の依頼をするとき重要視していること

・双方にとってのメリット、学生の到達ポイント、予算

→到達ポイントについて、

- 1 ここまで到達できれば良い、という到達ポイントを設定する
- 2 求めるクオリティによってスケジュール調整をする

B6.連携授業を実施する前に連携先とどのような内容の打合せをしているか

・コンテンツのボリューム、制作物のべ切、双方のメリット、完成度

→学生主体ではあるが、ディレクションは教員メインでコントロールしている

C1.貴学に産学連携推進の明確な担当教員がいるか・・・いる

C2.産学連携に関わる学科の教員数・・・6名

→多ければ多いに越したことはない

C2 - 2.担当教員の役職・・・教務部長、学科長

→グループ全体でも同じように学科のリーダーが取り組んでいる

C4 - 1.求められる「知識」を3つ

- ・PC・デバイス知識
- ・CG アプリケーション知識
- ・各種データ形式の知識

C4 - 2.求められる「技能」を3つ

- ・制作スキル
- ・マネジメントスキル
- ・コミュニケーションスキル

→技能を高める取り組みとして、先端技術のコンテンツが多いため0から組み立てる

経験をしてもらう。企業と学生の間で立って理解を促進するコミュニケーションをしてもらう

学生向けのマネジメントが必要

C4 - 3.求められる「態度」を3つ

- ・先進的な技術やデバイスへの関心
- ・情報収集
- ・礼節・感謝の気持ち

→取り組んでいることとして、技術やデバイスは興味がないとできない

その興味が情報収集にも繋がることで提案にも活かされる

※情報収集することで、連携する企業の選定にも活かされる

C5.ご自身は産学連携推進担当教員の経験があるか・・・ある

C5 - 1.担当教員を務めた際に実際に求められた・必要と感じた資質能力を3つ

- ・先端技術、モードへの関心、日々の探求心、勉強会や研究会への参加を通じて外部の方と交流をもつ
- ・交渉力
- ・コミュニケーション力

D1.担当教員に対してどのような支援を行っているか

- ・研修
- ・授業時間の調整
- ・直接の助言

→学内や外部の研修を活用

D2.担当教員は連携授業の進捗をどの程度把握、管理しているか ※1 が最も低く 5 が最も高い
(5)

D3.どんな方法・頻度・内容で進捗管理をするのが理想ですか

・進捗状況に合わせて上長に報告、情報共有。上長も随時アドバイスする。状況によっては上長、学校長も打ち合わせや交渉に参加する

→進捗管理をする上で、話が大きくなりすぎてしまい、現場レベルではどうしようもない話になってしまったことがある(ドコモ社長×グループ代表)学生の学び場の提供のはずが、企業レベルでの取り組みになってしまったことがある

D4.担当教員以外の職員のかかわり・支援があるか・・・ある

D5 - 1.現在の連携体制

- ・担当者（学生指導、企業との窓口）・上長（指導内容の確認・指示）・学校長（確認・最終承認）

D5 - 2.連携を推進する上で組織的な課題や、考える点

- ・担当者のスキル向上、底上げ

→昨年からは生成 AI の研究や取り組みを実施。そのためのスキルアップをしていかなければならないため、外部の研修等に積極的に参加してもらっている

E1.どのように事業評価をしているか

- ・連携先のアンケート／ヒアリング
- ・外部の有識者からの評価、管理職による評価

→アンケートや感想の取りまとめは必ず行う(学校、企業双方)

外部の有識者として、教育提携している企業にも事例紹介をし、評価を受けるグループ全体の統括にも評価をってもらう具体的な評価基準としては点数評価(5段階)を実施

E2.事業の評価規準は明確に設定できているか・・・できている

E3 - 1.具体的な評価規準

- ・外部評価による評価／連携企業・クリエイターによる作品評価は、成果物の採用、展示出展を評価規準とする

→各教員で目標設定をしている

カリキュラムと連動し、学校評価、企業評価がそれぞれにある

E3 - 2.評価規準は全職員（校内）に周知されているか・・・はい

→担当教員ごとに上長からのフィードバックを行っているため、評価基準は浸透している

E4 - 1.外部連携先から示される評価規準、外部連携先と共有化している達成目標

- ・連携企業・クリエイターによる作品評価は、成果物の採用、展示出展される。

世に公表する事を評価規準、達成目標とする

E4 - 2.産学連携授業について改善の予定があるか・・・ある

→学生が増えると職員も増えるため、新たに入った方が早期に連携授業に慣れることができる環境が必要。山中先生の考え：企業が実施する勉強会になるべく多く参加することが重要。教員の理解が進んでいない状態での連携は危険。授業だけではなく、学生募集広報の視点からアウトプットする力が必要

E5 - 1.産学連携授業についてどのように変更、改善しようとしているか

- ・新任教員のスキル向上、全校での産学連携への推進

E6 - 1.学生からどのようなフィードバックが欲しいか

- ・企業との連携を通じて、企業が求める人材、知識・技術を学べる
- ・体験出来てよかった
- ・自分が作った物が展示されて嬉しい
- ・作った物の出展が楽しい

→前期学生アンケート内容を転記

E6 - 2.外部連携先からどのようなフィードバックが欲しいか

- ・専門性を学んでいる学生さんと関わって良かった
- ・若者のアイデアで新しいコンテンツが創出された

→企業アンケートから転記

E6 - 3.かかわった教員からどのようなフィードバックが欲しいか

- ・企業、学生と共に先進技術を学び、知識と技術のアップデートとなる
- ・教員として常に最先端、企業の現場を知る事は重要である。

E7.産学連携授業を行うことで、学生によってどのような価値をもたらしたいか

- ・通常授業では学べない、実践力や現場の雰囲気を経験する。
- ・産学連携授業を通じて、社会に出るための実績作りや自信を養って欲しいです。

【その他】

→知識はいつでも得られるが、それをどう学生に伝えるか、企業とのパイプを作れるかが重要。教員は補助輪のような役割であり、常にバージョンアップをかける必要がある

→行政との連携はあるか？

産業振興課との連携が多く、そこから企業を紹介していただくことが多い

→先生の経験から、若い時にあったらいいなと思うことはあるか？

世代ごとの価値観に合わせられるスキルがあると良い

→分野を越えた産学連携はあるか

メタバース空間での工場見学イベントで、声優業を学ぶ学生にも参加してもらったグループ内にあるサッカーチームを応援するコンテンツ(Vtuber をチャリーディングの方が担当)

→コミュニケーションが難しい学生に対する指導の配慮等はあるか？

イベントや企業連携をする際、まずは導入として説明会や先輩の様子を見せることで雰囲気づくりをするようにしている※慣れさせる

【追加項目】

1. 必要と考える資質能力について、なぜそのように考えたか、感じたか (C5 - 1)

→回答した内容と同様

2. 必要と考える資質能力について、今、その自己研鑽や組織的なスキルアップのための支援として現在どのような機会があるか、また今後どのような機会を望みますか

・現在どのような機会があるか→研修への参加促進

・今後どのような機会を望むか

→引き続き企業や行政と連携して学生にチャンスを与えていきたい

予算を確保

3. 上記の（教員の）資質能力の評価について、これまでに実施していますか

→各教員が目標を立て、前期後期でフィードバックを実施している

4. (具体的な事例について) 外部連携の評価について現状どのように実施していますか

→作品が採用されるかどうか

学生が小学生に講義をする＝理解ができているという評価

世の中に学生が関わったことが実績として出るかどうか

5. (好事例について) 効果的な外部連携を推進するために、外部との調整・成果物共有・評価のために使用しているツール（デジタル・アナログ）がありますか

・外部との調整用ツール

→ケースバイケースなため、特に決まったツールはない※企業に合わせて全て使う

・成果物を共有・評価のためのツール

→各案件で臨機応変に行っているため特定のツールはない

6.現状の取り組みについて実感している価値（学校でフォローできない情報へのアクセスや、技術習得など）以外に、「学生のキャリア形成」の観点で、先生方が感じる価値はどのようなものがありますか
→インターンシップ等でイベント参加すると学生へ個別でのアプローチがある(学校でフォローできない)。そのような新しい動きに対してどこまでフォローできるか。新たなものをどんどん活用することで成長してほしい

⑥つくば総合学院（茨城）つくばビジネスカレッジ専門学校

- ・所属校・・・つくばビジネスカレッジ専門学校
- ・回答者・・・高松 秀岳（ヒデタカ）先生
- ・専修学校における教員経験年数・・・15年以上

→元々はグラフィックデザイナーの仕事をして10年していた。

その後、転職し母校で非常勤を経験し現在のつくばビジネスカレッジ専門学校の常勤に。当初は、学科全体は20名程度で教員は1人（自分のみ）。当時の課題は対外的なアピールが必要なことで、外部から来たものを産学連携という形としてアピールを行っていた。産学連携の定義が曖昧だったが、現在は自分なりの定義で構築している。

- ・職業実践専門課程の認定を受けている分野・・・工業

A1-1.産学連携授業を実施している学科名・目標・時数

- ・学科名・・・ビジュアルデザイン学科（グラフィックデザインコース・マンガイラストコース）

Q ビジュアルデザイン学科の学生人数は？

→現在100名程度（両コース2学年合わせて）

上記学科に加え、プラス1年の研究課程を作って10年目を迎える。入社後、学生数が増えている。

Q 就職先はどのようなところですか？

→業界への就職がなかなか厳しい。

・目標・・・地域団体より依頼されたデザイン物の制作を、クライアントの意向に沿って市場での使用に耐えうるレベル（デザイン事務所と同等のレベル）への昇華

Q 産学連携の形は、学校に依頼がきたものを中心に実施している？

→基本的には企業から依頼があった依頼物を作って、それを納品している。研究課程については、自ら持ち込む形をとっている。

Q 研究課程の形態はどのような形？

→学校推薦枠5名（内部進学用）、一般枠5名の計10名定員で構成。学校推薦枠は学費免除があり免除が得られない学生が一般枠で研究課程に進む場合も。特にマンガイラストコースについては、編集者との密な関係の構築のために研究課程を選ぶ学生も多くいる。実際に漫画を学ぶのには2年では短い。茨城県内のライバル校では3年制の学科があるが、3年制はややハードルが高い。そこで自校では2年から入り、必要に応じて研究課程に進んでいく形をとっている。

- ・時数・・・通常のデザインワーク内で案件のボリュームに合わせて臨機応変に対応

Q 年度によって時間数はバラバラということでしょうか？

→ここ数年で、大体毎年依頼されるものが固定されてきた。

固定されているものは大体スケジューリングできるが、それ以外（新規の依頼）については、都度検討し、適切に配置している。依頼の受け入れは、案件のボリューム・レベルを見極めて適切なタイミング（学年・時期）に配置。依頼を受けることによって本来やるべきことがやれなくなることもあるが、コミュニケーションをとったり、非日常な時間帯を過ごすことで、実力がつくと思っている。

A1 - 2.産学連携授業を実施している内容

・主に地域団体から依頼のポスターデザインやキャラクターデザインを中心とするデザイン案件。また、広義でのデザインに関わる相談を受けての企画提案など

Q 企画提案までやるのですか？

→企画提案を行うのは研究課程が対象となっている。

Q デザイン会社と同じレベルのデザインをすると思うが、報酬についてはどうしているのか？

→基本的には学生の学びの場をいただきたいというスタンスでお願いしている。実際にプロに頼むような質の担保と、時間に関すること（スムーズにいくとは限らない）を伝えた上で依頼を受けている。特に、地元の田舎ですとデザイン会社が無い（印刷会社にデザインをお願いする等）、デザインの質があまり良くないといった中で、依頼先の戦地に企業も困っている。また、長年やっているとも毎年同じものになってしまったり、自分たちでデザインをやらなければいけない等の問題を抱える企業もある。実際に依頼を受ける際には、報酬というわけではないが、学校名、学科名、学生名のみ入れてくださいとお願いをしている。学生達に対しても、作品に名前を入れることはなかなか事を理解してもらい、それが報酬の代わりとなっていることを伝えている。それでも企業側様から報酬を頂ける場合は、クオカード等で提供してもらおう。もちろん、企業によっては現金でいただけることもある。報酬をいただけた場合は、全て学生に還元している。

A1 - 3.現在の主な連携先企業・団体の名称

- ・茨城県土浦市スポーツ振興課
- ・茨城県土浦市広報広聴課シティプロモーション室
- ・茨城県牛久市教育委員会文化芸術課
- ・茨城県牛久市教育委員会スポーツ推進課
- ・かすみがうら市歴史博物館
- ・福祉支援施設東京空色株式会社
- ・株式会社サイドランチ
- ・株式会社不知火プロ 他多数

Q 多くの連携先企業がありますが、どのように集めているのですか？

→最初の出だしは「茨城県牛久市教育委員会スポーツ推進課」からの依頼から。卒業生が関わっていたマラソンの関係で、学校を紹介してもらい話をいただいた。結果、高評価をいただき継続し今に至っている。また、同団体の違う部署からの依頼（茨城県牛久市教育委員会文化芸術課）もきている。現在は上茨城県土浦市スポーツ振興課、茨城県土浦市広報広聴課シティブロモーション室茨城県牛久市教育委員会文化芸術課からの依頼が多くなっている。時間の経過で色々な口コミで広がっていき、各所から相談を受けるようになっていった。長くお付き合いさせていただいているものほど、どのタイミングで実施すればよいかを想定しやすくなっている。上記の他にも、学校発信の企画モノが2つほどある。（研究課程案件）ただ、連携企業が少し多くなってきているのも事実で、どこかで整理するタイミングだと考えている。基本は拒まずに、依頼を受ける。場合によっては、クラス全体ではなく、一部の学生でプロジェクトを組んで受けた依頼をこなすこともある。

A1 - 4.連携のアプローチはどちらからか・・・企業・団体側

→企業側からのアプローチが多い。今は、研究課程のアプローチを新たな試みとして取り入れたものを実施している。デザイン思考を取り入れ、ヒト・モノ・コトをしっかりと考えながら取り組むようにしている。例えば、どこそこの〇〇公園があり、どうすればその公園をより良くしていけるのか？を考える場合、キャラを作って、企画をして企業側に持っていく等を実施。地元にこういうデザインする学生達がいるという繋がりを持たせていく事を目的としている。また、メディアに取り上げられれば、学校の広報にもつながっていくと考えている。

B2.現在の産学連携授業についての満足度・・・大変満足している

→依頼を受けて作成された制作物は、広報にも使えるし、学生のモチベーション向上にもつながっている。我々が行っている産学連携は、選ばれるのは一人しかいない。例えば、ビジネス系で国家試験を受けたら、一人しか合格しないというのはなかなかない。多くの人が合格するはずである。それとは違い、企業に選ばれるたった一人になることをモチベーションとしている。また、指導する先生たちも、多くの経験をすることで、引き出しが増えていくという効果もある。

B2 - 1.現在の産学連携授業について満足している理由

- ・学生の成長を実感できる
 - ・学生の取り組み意識が高まる
 - ・学生の責任感を刺激できる
 - ・実際の仕事を体験できることや、その実績による他校との差別化が図れている
 - ・採用学生の本人はもちろん、ご家庭も喜んでくれる。また、採用に至らずともクオリティの高いポートフォリオの助けとなる作品を生み出せる
 - ・クライアントの評価が高く、それによって次年度の依頼につながったり、他部署への紹介など、次に繋がる実績を生むことが出来ているため、思わぬ口コミ効果も生まれている
- 実際に、学生達がモチベーションを下げないで取り組めるかどうかは、先生方の腕前にかかっている。色々な学生がいるなかで、選ばれた学生だけでなく選ばれなかった学生達についても、それぞれを

しっかりと見てあげる。例えば、出来上がった作品に対して「こんなアプローチを考えたんだ」とほめてあげる、学生達の評価と企業側の評価が違うこともあり、それもモチベーション向上に還元させるような声掛けを行う、等

B2 - 2. 好事例と感じた授業についてどんな点が評価できたか

- ・上記 2 - 1 と同様

B2 - 3. さらなる充実のためにどんな校内外の支援が必要か

・現在の状況では、それらに割く時間を用意することが難しいほど案件が多い。そのため1年生・2年生ではなく、さらに上のデザイン研究課程にその時間を見い出す取り組みをしている
→本来、専門学校は2年制ですので、2年の中で企業連携をやらせていきたいと思っているが、毎年、質・レベルが上がっているの、入学する学生達は大変になっている。だからこそ、研究課程を作ることで、安心できる時間の確保に繋がっている。

B3. 産学連携授業のカリキュラムにおける位置づけ

・案件のレベルにより1年後期か2年次で対応。主に2年前期が多いが臨機応変に対応
→ある程度（レベル）の作品として形作れるのは2年生の後期になる。最低でも1年生の後期から。案件によっては、1年生に頼むのは厳しいという事もあるので2年生に任せることも。2年前期で厳しい案件は、先生方のテコ入れをすることもある。

B4. 連携先の選定

- ・上記は全て当てはまるが、受け入れは教務部長の経験から判断している

B5. 連携先に初回の依頼をするとき重要視していること

・目指す取り組みに対する「想い」を明確に伝えている
→連携先から依頼される場合も持ち込む場合も、なぜこの案件を受けるのか、持ち込むのかを明確に伝えていく。実際に制作するのは学生でプロではないということ。企業様から学びの場を提供していただくという認識を共有していただくことが重要だと考えている。ただ、実際に市場に出回るものなので、先生がなんとかしますという覚悟で取り組むことを伝えている。先方も、ただ依頼するだけでなく、学びの場を提供しているという役割を担っていることを意識してもらう。

Q 連携先への就職については？

→当校では、地方公共団体からの依頼が多く、そこに就職するのは難しい。
ただ、一般的にデザイン系の学生達はポートフォリオを作るので、そこには役立っている。実際のところ専門学校生の作品なんてたかが知れている。何故ならば、大体どこの専門学校でも教える内容はほぼ一緒だから。企業側のスタンスも入社後3か月で育てていくという意識が強いのが実情。だからこそ、普通のデザイン系の専門学校で学んでいることだけではなく、この企業連携を通して、実際の世に出る作品を作ってきている事が強みとなる。就職内定直結ではないが、他のデザイン系の専門学校の学生の

ポートフォリオより、当校の学生のポートフォリオの方が質が高くなっていると感じる。

B6.連携授業を実施する前に連携先とどのような内容の打合せをしているか

- ・ 案件により異なるため一概には言えない

C1.貴学に産学連携推進の明確な担当教員がいるか・・・いる

→高松先生がメインで業務を行っている。他にもう 1 名いるので割り振りしている。

C2.産学連携に関わる学科の教員数

- ・ 窓口は 1 名で、案件内容に相応しい講師に依頼している。主に 2 名が中心

→窓口は高松先生。

C2-2 担当教員の役職・・・教務部長

→高松先生。

C4 - 1.求められる「知識」を 3 つ

- ・ 領域に対する知識
- ・ 領域に対する経験
- ・ 柔軟な対応力

Q個人・組織で伸ばしていくものは何かあるか

→先生はどこかから知識を吸収しなければいけない。しかし、専門学校は最前の現場ではないので、最新の知識を得ることが難しい。経験は、産学連携は通常と違い、ファシリテーション能力も必要。これを学ぶのは難しい。自分は働きながら大学に行っていたので、そこで学んだ。ビジネス系の先生は、資格を取得させる。そこには明確な答えがあるので、そこに向かった指導をすれば良い。しかし、デザイン系の先生の場合はそうではないと考える。生徒が 10 人いたら、10 人それぞれにまずは拡散的思考を理解してもらい、その後、集約的思考に変換していく必要がある。デザイン系の先生はそういう能力を自然に学んでいると思う。それを養うために、高校から依頼される体験授業等（他流試合⇒高校で授業をしたり、OC の体験を考える）をしていかないと、なかなか養われないのではないかと考えている。

Q現在先生は何人態勢？

→デザイン系の先生は 4 名。1 名は十分能力はあるが、残り 2 名はまだ経験不足の状態。

Q新人が入ったりする？

→小さい学校なので出入りは多くない。実際に学生数が増えても不安が多いのが現状。今、この（大変な）経験を受けておくことで（将来）自分にとって有用となるという姿勢が大事。

C4 - 2.求められる「技能」を3つ

- ・コミュニケーションスキル
- ・あとは案件により異なる

Qコミュニケーションスキルは、学校で場を提供することはある？自己開拓？

→企業から依頼があったものをこなす。

企業様の繋がりで紹介があったり、研究課程の企画等を行うことで得られると考えている。

C4 - 3.求められる「態度」を3つ

- ・新しいことにワクワクできるか
- ・デザイン思考を持っているか
- ・全体を見渡せるか

→この3つの態度は担当する教員にとって必須。新しい案件は怖い、明確にできるか分からないことを受けるのは怖い。その中で、ワクワクの気持ちがないといけない。ワクワクが潜んでいないと受け入れに抵抗があり即決できない。やらなきゃわからない。全体を見渡せる力が必要。本校で出来ることはここまでですとしっかりと伝えることも必要。

C5.ご自身は産学連携推進担当教員の経験があるか・・・ある

C5 - 1.担当教員を務めた際に実際に求められた・必要と感じた資質能力を3つ

- ・先に述べたものが必要

D1.担当教員に対してどのような支援を行っているか

- ・人員配置の考慮
- ・授業時間の調整
- ・直接の助言
- ・その他

D2.担当教員は連携授業の進捗をどの程度把握、管理しているか ※1 が最も低く 5 が最も高い

・ 5

→先生方には、ちょっと無理をお願いしている案件もあるが、しっかりと把握できている。

D3.どんな方法・頻度・内容で進捗管理をするのが理想ですか

- ・実際に関わる。もしくは直接の担当者と細かな話し合いをする

※案件に関する無駄話・おしゃべりを含む

→自分の求めているレベルをしっかりと伝える（学生の動きも含め）ことが重要。

D4.担当教員以外の職員のかかわり・支援があるか・・・ない

Q 学科を超えた連携は？

→やりたいが、無理という意見が多い。デザインだからできるという偏見も多い。他学科との連携については、時間の制約や各学科が自分たちの学科を一番に考えているため実現が難しい。実現のためには、土壌の醸成が必要。

E1.どのように事業評価をしているか

・管理職による評価・学生からの評価は、進級時と卒業時の学校・担任満足度アンケートによる。企業からの評価は、その企業との案件が修了した後での成果や評判を受けての事後の交流において

Q どれくらいの頻度で評価を行っている？

→年 1 回くらい。産学連携の満足度調査をしているわけではない。通常の人事評価や、全校で学校満足度アンケートが一つの評価となっている。企業様の評価については、アンケート等は実施しておらず、修了後のお話の中を多くいただくことや、お礼メールの内容、継続して依頼をしてもらうことは良い評価と考えている。

E2.事業の評価規準は明確に設定できているか・・・まだできていない（ほしい）

E4 - 1.外部連携先から示される評価規準、外部連携先と共有化している達成目標

・明確な評価基準はないが、次年度への継続依頼はひとつの評価だと受け止めている

E4 - 2.産学連携授業について改善の予定があるか・・・ない

→案件を整理していく過渡期のフェーズに入ってきた。

今後は卒業生を登録制にして、依頼を回す形ができればよい。

E6 - 1.学生からどのようなフィードバックが欲しいか

・モチベーションの変化

Q どういう場面で知ることになりますか？

→アンケートや、個別に話をしているとき、他の先生経由で聞いたりする。

E6 - 2.外部連携先からどのようなフィードバックが欲しいか

・依頼案件がどのような役割を果たし、どのような評価であったか

→依頼をいただいた担当の方から、大体こんな感じでしたよという言葉が多くいただいたときに、高評価だったと思う。言葉が少ない場合は、評価が高くないと思っている。

E6 - 3.かかわった教員からどのようなフィードバックが欲しいか

・指導した学生たちがどのような成長を見せていたか

→終わった後に学生達にヒアリングする。

良い・悪い、含め、どうゆう成長があったかを伝えてほしい。

E7.産学連携授業を行うことで、学生によってどのような価値をもたらしたいか

・モチベーションの変化

・成長の実感

・自己肯定感の向上

→上記の他に、学生達が持っている能力が社会的貢献していることを実感してほしい。ただ単にキャラ作りをするだけではなく、社会的にどう貢献しているのかを実感することが大事。特に、担当している学科は、単なるお絵かき学科という印象を持たれることも多いが、自分たちの制作物が、どう社会的な貢献をしたのかを学生に気付いてほしい。

Q 著作権はどうなっている？

→ポスターデザインはご自由に使ってくださいというスタンス。ただし、学校名、学科名等は入れさせてもらう。企業・学生両方に了承を得ておく。キャラクターもご自由に使ってくださいというスタンス。ただし、事後に収益事業となった場合はご相談くださいと伝えている。先にも話しましたが、報酬としてはデザイン料・原稿料はクオカード等で提供してもらう。ただし、著作人格権は手放さないように心掛けています。また、学生が卒業後も、お仕事をくださいと伝えておく。現在は口約束程度だが、今後は契約書を用意することも検討。

【追加項目】

1. 必要と考える資質能力について、なぜそのように考えたか、感じたか (C5 - 1)

→着地点を見出すためには、これが必要と考えたため。依頼を責任を持って受ける場合、着地点を見据えて判断するにはこの能力が必要と考える。

2. 必要と考える資質能力について、今、その自己研鑽や組織的なスキルアップのための支援として現在どのような機会があるか、また今後どのような機会を望みますか

・現在どのような機会があるか

→難しいですね。5年後くらいに分かることだと思うが、後輩が自分の背中を見ていくのが学びの場と考えている。

・今後どのような機会を望むか

→他校の意見を聞く場。成功事例だけでなく、失敗事例も含めて、事例発表を聞く機会や情報交換（新たな取組等）をする機会があると良い。

3. 上記の（教員の）資質能力の評価について、これまでに実施していますか

→他の先生の評価は、明確な基準は今はないが、振り返ってみると、「常に情報共有しているな」、「肝を外してないな」ということを意識していると思う。今回のヒアリングの機会が考える良い機会となった。まだ言語化できていないが、今後検討していく必要があると考える。

4.（具体的な事例について）外部連携の評価について現状どのように実施していますか

→明確にはなっていない。事後にいただいた話を、他の先生と共有している。

5.（好事例について）効果的な外部連携を推進するために、外部との調整・成果物共有・評価のために使用しているツール（デジタル・アナログ）がありますか

・外部との調整用ツール

→メールと電話がメイン。

・成果物を共有・評価のためのツール

→成果物を持参する場合は、しっかりと紙で持っていく。その際、各成果物のポイントを裏に着けたりして、学生達の作品に込めた思いがしっかりと伝わるようにしている。また、持参した際に企業が選定するための判断へのアドバイスも行っている。

6.現状の取り組みについて実感している価値（学校でフォローできない情報へのアクセスや、技術習得など）以外に、「学生のキャリア形成」の観点で、先生方が感じる価値はどのようなものがありますか

→実際のお仕事ができる事が一番大きい。第三者の存在を意識することをわからせることが一番価値があると感じる。マンガ・キャラクター制作は趣味の延長や、好きの延長となり作品が自分本位となりがち。そうではなく、これをしたら人は喜ぶ、動くというデザイン思考が重要。そういった意味でもこの産学連携という言葉が非常にしっくりきていると感じる。

Ⅲ・結論

・平均的な産学連携授業の時間としては「60時間」実施が多かった。また、通年で行っている学校については「540時間」という非常に長いケースもあった。

・連携内容についてはカリキュラムの一部を担当してもらい演習や実習を行う「学内連携型」と、外部のイベントや企業の制作物を作成する「学外連携型」の2つに分かれている。

・連携先企業の特徴は地元でつながりのある企業が中心だが、中には行政と連携して数多くの案件に取り組んでいる学校もあった。アプローチについては「学校側」からと「企業側」からが半々であった。

・連携授業に関する「満足度」について、6校中5校は「満足している」状況であったが、「満足していない」学校もあった。その理由としては、「連携している企業数の不足」が挙げられた。

・産学連携を推進するために求められる資質としては、ほぼ全ての対象校に共通しているのは「コミュニケーションスキル」であった。

・「担当教員への支援」として共通していたのは先輩や上司からの「直接の助言」が共通していた。

・連携授業の事業評価の方法としては「学生アンケート」の実施が多かった。

・「評価規準」について対象校のうち半分しか設定出来ておらず、出来ている学校については「成果物の採用」や「展示出展」、「学校で作成している評価シート」などがあった。

・資質能力向上のための支援として多かったのは「外部への研修参加」であり、その中でも全専研の研修を活用しているケースが多かった。

・「産学連携授業」についてはそれぞれが価値を感じており、推進していきたい気持ちはヒアリング対象校全てに感じられた。その思いと同じように課題も感じており、「人員の不足」や「コストに関する問題」は共通して抱えていた。また一部「連携先企業の開拓」も課題として挙げられていた。

今回のヒアリング調査結果から課題を感じている学校へのフォローにつながるような講座や研修の開発を進めていきたい。先進的に連携授業を行っている学科のケーススタディの共有や、地域的に連携する企業が限定されてくる学校への有益な情報提供などを行っていければと考えている。